

# 令和 2 年 度 学 校 評 価 書

学校名	兵庫教育大学附属幼稚園
-----	-------------

## 1 学校教育目標

心身ともにたくましい子どもの育成	○ 健康な体の子ども	○ よく考えて最後までやりぬく子ども	○ やさしく豊かな心をもつ子ども
------------------	------------	--------------------	------------------

## 2 本年度の重点目標

(1) 園運営 (2) 教育研究活動  (3) 地域への貢献 (4) 他校種との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、職員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。</li> <li>・記録をもとに遊びについて話し合い、研究テーマ「遊びが充実する保育を目指して一遊びって大切!?!」(二年次)のもと研究を進める。</li> <li>・研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。</li> <li>・保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。</li> <li>・地域に向けて積極的に情報発信を行うとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKi」との連携を図る。</li> <li>・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。</li> </ul>
--	--

## 3 自己評価結果(達成状況)【A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない】

## 4 分野・領域ごとの学校関係者評価

分野・領域	評価項目(取組内容)	取組達成の状況	評価	改善の方策	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
園運営	○組織運営 ・職員一人一人の主体的な取組を促すよう、園長がリーダーシップを発揮し、大学と一体となった園運営を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員が各々で目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、管理職が教員会議やその他の場面で機会を捉えながら指導助言を行った。</li> <li>・会議等を通して、働き方改革に対する職員の意識を高めるとともに、教育の質を確保しながら職務内容や行事の見直しを行った。</li> <li>・大学に設置された「新型コロナウイルス感染症危機対策本部会議」に園長が出席することによって、大学と園が連携しつつ様々な対応に当たることができ、その内容を教職員にも周知徹底した。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新園長としてのこの1年の経験を踏まえ、来年度は具体的な事業のあり方を含め、園運営について教職員とより積極的に情報交換を行い、幼稚園全体の保育の質を高めていくよう取り組んでいきたい。</li> </ul>	自己評価は妥当である。  特に「組織運営面」では、管理職が積極的に関わりながら全職員が保育の質を高めようとしている。前年度までの体制を土台にして着実に進められている様子が窺える。  また、「危機管理体制」に関しては、今回の長期にわたるコロナ禍での感染予防対策は園運営での重大な危機管理案件と考える。したがって、本来は評価項目に追加し、達成評価をすべきである。ただ、園内で感染が起きていないことからすれば、実情としては十分な取り組みと成果があったと認識する。
	○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け課題を確認しながら、計画的に保育を行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育課程に基づき、学年経営及び学級経営の方針を立てて計画的に保育を進めた。特に、今年度は新学期のスタートが6月からとなったため、保育計画を大幅に変更して実施した。</li> <li>・学期ごとに会議等で振り返り、達成状況や課題を確認しながら、保育の質を高めるよう取り組んだ。</li> </ul>	A		
	○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容については、管理職や担任が機会を捉え、話したり文章にしたりして、伝えていく。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふよっこだより」を11回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取組等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。また、今年度は新型コロナウイルス感染防止についての園の取り組み、並びに保護者へのお祝い文書の配布を適切な時期に数回行った。</li> <li>・園の教育を理解してもらうために例年実施している、全学年の保育参観及び保育参加日(「ふよっこデー」)は残念ながら実施できなかったが、降園時に各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿に関して保育のねらいや幼児の育ちを個別に伝えるようにした。さらに、今年度は「誕生会」を利用して来園した保護者に対する懇談を丁寧に実施した。</li> <li>・預かり保育利用者は、日々の保育説明を聞く機会が少ないため、迎えの時間等を利用して管理職や教職員が直接話をしたり、掲示を工夫したりする等に努めた。</li> </ul>	A		
	○危機管理体制 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の点検とその改善・拡充に取り組む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度は、養護教諭を中心に新型コロナウイルス感染防止対策を徹底周知しながら講じた。また、保護者に対しては「ほけんだより」により対策への協力を要請した。</li> <li>・園内の施設、設備、備品等の安全点検を随時行った。特に、ピオトープの整備を行うとともに、木製遊具の大幅修理を行った。</li> <li>・毎月1回「子供安全の日」を設け、学年に応じた安全指導を行うとともに、地震、火災等の避難訓練、保護者と連携しての引き渡し訓練を行った。</li> </ul>	C	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山国地区のすべての子供たちの安全確保のために、附属学校園の一体化した取組を進めていきたい。</li> </ul>	

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育研究活動	<p>○教育活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究活動を生かしながら「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本園の特色である「うれしのタイム」の趣旨（自発的な活動としての遊びの中で自分を表現・創造することで幼児期に育てたい力を養う）の再確認を図るべく、職員会議等の場において、具体的事例を題材にして保育観や子供観の共有を行いながら日々の保育に取り組んだ。</li> <li>週の初めに、各学級の週案を副担任・養護教諭を含む全職員に周知し、全職員の共通理解を図りつつ計画的な保育を行うよう意識して取り組んだ。</li> <li>園行事については、コロナ禍のため中止や縮小を余儀なくされたものが多かったが、その中でも園児に欠かせない「運動会」と「生活発表会」については昨年度の反省や保護者アンケートも参考にしつつ、感染防止に十分配慮しながら無事に実施、終了することができた。</li> </ul>	A	
	<p>○幼児理解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>幼児一人一人のよさや特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーテンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼児一人一人の記録に基づき、環境の構成や援助を考えることを継続して行うとともに、定期的に職員で話し合いを行った。</li> <li>園再開後当初の園児の心身状態が心配であったため、キンダーガーテンカウンセラーに例年以上に通常保育の観察をってもらうようにした。また、保護者相談についても求めに応じてカウンセラーに実施してもらった。それらの情報については、園児の保育をする上で必要な場合には閲覧できるようにするとともに、職員会議等で情報を共有した。</li> <li>加東市発達サポートセンターはびあによる加東市在住幼児に対する個別指導を受ける場を2回もった。</li> <li>就学に向けて、希望進学先調査を行うとともに、担任や管理職が保護者からの進学相談に対応した。必要に応じて希望進学先と連携し、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。</li> </ul>	A	
	<p>○研究活動</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>研究テーマ「遊びが充実する保育を目指してー遊びって大切!?ー」（二次）のもと研究を進める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各教員が日々の子供の遊びの記録をとり、それを定期的に職員で協議することを通して、研究テーマに迫ろうとした。今年度は発表会での研究討議は学年毎で開催をするとともに、本学幼年教育コース教員によるアドバイスを得て、充実した研究がなされた。</li> </ul>	A	
	<p>○子育て支援事業</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>保護者の子育て力向上を支援する取組や子育て環境をよりよくするための取組を行い、子育て支援事業の充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>機会を捉えて幼児期の育ちについて伝えた（誕生会で集まった保護者に対し、子育ての悩みについて話を聞くとともに、適宜アドバイスを行った）。</li> <li>コロナ禍であったが、6月の園再開後はこれまでと変わらぬ預かり保育を実施し、就労等家庭の子育て環境の支援を行った。なお、今年度特別に大学から配置されたスクールサポーターが預かり保育指導員の補助を行い、支援がより充実した。</li> </ul>	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>自己評価、及び改善の方策は適切である。</p> <p>コロナ禍においては、教育・保育もこれまでとはまったく異なった教育活動を余儀なくされ、大変な苦労があったと思われる。その中でも、教育の質を落とすことなく、むしろ高めようと努力した取り組みの跡が記録から窺える。</p> <p>これまで幼稚園が大切にしてきた方針を大事にしつつ、さらに園児の「心が育つ」教育が展開されることを希望する。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
地域への貢献	○開かれた幼稚園づくり ・地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間通して実施するとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKI」とも連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。	・今年度は、コロナ禍という特殊事情であったため、子育て支援ルーム「かとうGENKI」との交流や連携がまったくできなかった。また、未就園児親子参加の「子育てひろば」については、入園希望の親子のみを対象に1回のみ実施した。 ・運動会等の行事についても、最小限の公開（保護者2名もしくは1名のみの参加）にせざるを得なく、開かれた幼稚園づくりに向けた活動はほとんどできなかった。	D	・コロナが収束し、学外者との交流制限が解除され次第、例年同様の事業を展開していきたい。
	○研究発表や公開保育 ・研究発表会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。	・今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、研究発表会とそれに伴う公開保育については学外関係者への公開は行わず、大学教員、附属小学校教員、及び学生を中心とした大学関係者のみを対象とした。 ・日本教育大学協会幼児教育部門近畿地区会例会において、「コロナ禍における大学、附属学校園での実践の現状と課題」について発表を行なった。	C	・来年度は完全公開ができない場合においても、オンラインで公開保育や研究発表会を可能な限りできるように策を検討していきたい。
他校種（小・中・高校・大学）との連携	○校種間連携 ・近隣の高校も含めた他校種と連携し互恵性のある交流活動を行う。	・今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年実施していた附属小学校児童並びに附属中学校生徒との交流、さらには県立社高等学校生徒との交流を行うことができなかった。 ・附属三校園の連携を進める三附属連携推進協議会についても、今年度は実施することができなかった。 ・本園職員が県立社高等学校の授業に、職業紹介の講師として参加協力した。	D	・コロナが収束し、交流活動が可能となり次第、少なくとも例年同様の事業を展開していきたい。
	○実地教育（教育実習） ・大学教育とつながりをもった効果的な初等基礎実習を実施する。	・各クラスで行う反省会に大学教員が参加し、大学の授業（リフレクション）と連携をもたせ、より効果的な指導を行うことができた。 ・実習生には、実習後も本園の研究発表会への参加（大学の授業「教職実践演習」の一環）を呼びかけ、大学教育との連携を図った。	B	・学生が教育実習以外に本園の事業（運動会や生活発表会等）について参加可能になれば、例年と同じく実地教育と関連づけた学生指導を積極的に実施したい。
	○大学との連携 ・大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取組を行う。	・幼年教育・発達支援コースの大学教員には、本園教育の質の向上と研究推進のために、研究発表会への参画だけでなく日常保育についても数回観察してもらい、様々な助言を得た。 ・大学教員及び伝統工芸士や兵庫県陶芸美術館スタッフの指導のもと、ここ数年実施している園児の4・5歳児の陶芸活動を、新型コロナウイルス感染防止対策を十分に講じながら実施した。ただ、親子活動については最小限の実施にとどめた（5歳児の竹馬作りのみ）。	B	・コロナが収束し、学外者の制限が解除され次第、例年同様の事業を展開していきたい。

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>自己評価は妥当である。</p> <p>かとうGENKIとの交流・連携、子育てひろばや研究会の開催など、コロナ禍で色々と計画していた事業が実施できなかったことは残念だが、これらは仕方ないことである。</p> <p>一方で、コロナ禍だからこそ出来ることもあるのではないかと考える。色々と試行錯誤しながら地域への貢献に一層取り組んでほしい。</p>
<p>自己評価、及び改善の方策は妥当である。</p> <p>地域貢献と同様、大学や関係期間との連携は難しかったと推察する。校種間連携については、コロナがいつ収束するか分からない状況だからこそ、子供たちのためにこんな交流ができるのではといった新しい発想を生み出してほしい。</p> <p>まずは例年同様に戻しつつ、新たな課題のもと取り組んでもらうことを期待する。</p>